

## 魔法のワンドを振り返って 中邑賢龍

学校一斉にタブレットの導入が進むというニュースをよく耳にする。魔法のプロジェクトに参加した先生達はそのニュースを聞いてどのように感じるのだろうか？

魔法のプロジェクトに参加した先生達は、最初はタブレットを使わねばと必死であった。しかし、タブレットではない方が学び易い子どもの存在、また、紙の教材の方が優れる場面に気付くと、タブレットが万能であるという魔法が解けていった。子どもが自分に合った学びをするためのツールとしてタブレットを認識し始めた先生達にとって、この一斉導入の流れは少し違和感を感じたかもしれない。私も同じように違和感を感じる。しかし、それはタブレットの一斉導入を否定するのではなく、タブレットを一斉に使用させる事に違和感を感じるのである。

今年、大学入試センター試験ではじめて読みに困難がある生徒のための読み上げ入試が実施された。また、高校入試でも書き障害のある子どもにパソコン利用入試が認められた。タブレットを使用することに合理性がある子どもに対して配慮の1つとしてその利用が認められる事をととても嬉しく思う。それならば全ての教科書を電子化し、試験もタブレットを標準にすればいいのではと考える人もいるかもしれない。しかし、それは早計である。液晶画面が嫌いな、あるいは、タブレットの操作になじめない子どもも存在する。学びや評価の手段が1つに収束すると必ずそこから弾き出される子どもが生まれてくる。その結果、彼らが新たな障害としてクローズアップされることになるに違いない。

インクルーシブ教育の推進は多様な子ども達を教室の中で抱えることを意味する。先生達は多くの子ども達に合わせた教育を行おうと考えているが、多様性が増すと全ての子どもに合わせることは困難になる。せつかく多くの子ども達を効率的に教える事が出来ている今の通常教育を一部の子どものために大きく変えるのは無理があり合理的だとは思えない。もし、タブレットによる個人の能力の補償や拡張を通常教育の中で認めれば、そこに適応出来なかった子ども達も自らタブレットを活用してこれまでの授業に参加出来る可能性が生まれる。

残念ながらタブレットを教室に設置して授業の度にそれを使うだけでは、タブレットを自分の能力の一部として自由に使いこなすには至らない。子ども達

が帰宅後に宿題を解き予習をする、地域で買い物をするなど日々の生活に常に傍にタブレットがあればそれは一部の生徒にとって不可欠なツールとなる。

今日では子ども達も含め我々誰もが必要な場面にスマホやタブレットを活用している。障害の有無に関わらず子ども達が必要に応じてタブレットを活用し一斉に学べる授業を考える時期に来ている。学習の本質が何か問われているとも言える。